

〈巻頭言〉

これからのカリキュラム・マネジメントの課題と展望 －資質・能力の育成と人間性の涵養を実現するために－

Future Curriculum Management Issues and Prospects

－ In Order to Develop Qualities and Abilities and Cultivating Humanity －

関西福祉大学 加藤 明

要約

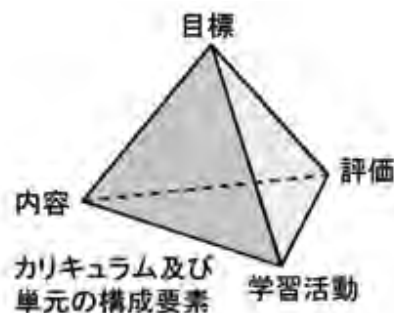
カリキュラムが学校教育の第一の特長なら、そのマネジメントは教師のコンピテンシーとして第一義のものである。カリキュラム・マネジメントとは、めざした目標の実現のためにどのような教科内容を、どのように教材化し、どのように展開してその成果を確かめ、今後のカリキュラムにも反映させていくかの見通しである。この見通しは、目標の設定から始まるものであり、目標の設定は入り口であると同時に出口としての評価の裏返しでもある。このような問題意識からの目標設定のあり方を考察するのが、本稿のねらいである。この稿で明らかになった目標の総体を実現するためのカリキュラム・マネジメント及び授業設計のあり方については、次の機会に譲るものとする。

1. カリキュラム及びカリキュラム・マネジメントとは

学校教育におけるカリキュラム、教育課程とは、学校教育の目標を実現するためどのような内容やどのような活動によって展開していくかの入り口から出口までの見通しをプランニングしたものである。当然のことながら、そのカリキュラム、教育課程には、どこでどのような手だてによって成果の実現を確かめるか、といった評価についても位置づけられていなければならない、その評価によって十分な成果が上がっていないようなら、その後の展開の軌道修正がなされなければならない。途中、途中の成果の確かめのための評価、つまり形成的な評価にもとづくその後の臨機応変で適切な軌道の修正によって、出口において、めざした目標の実現を図るのがカリキュラム・マネジメントである。

〈図1〉のカリキュラムの4つの構成要素は、カリキュラムの最小単位である単元の構成要素でもあり、カリキュラムのめざす目標は、単元の目標の実現を統合した結果として実現されるものである。

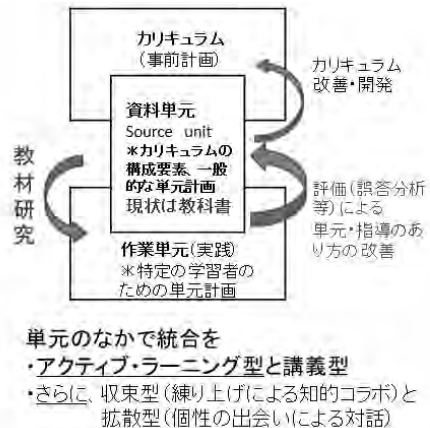
我が国においては、学校教育におけるカリキュラムである教育課程の基準を示すのが「学習指導要領」であり、この基準のもとに作成された、各学校の創意工夫によるカリキュラム編成・単元構成のプログラムが学校中心カリキュラム（school based curriculum）であり、これをもとにして、途中、途中の節目において成果を確かめ、軌道修正しながら教育活動を展開し、目標を実現する。さらに成果を振り返って内容及び学習活動の設定、場合によっては目標の見直しも行い、より効果的な教育活動のためのカリキュラム改善・開発を行う。カリキュラム・マネジメントとは、このように現在進行中のカリキュラムのマネジメントにとどまらず、終



〈図1 カリキュラムの構成要素〉

了後に、よりすぐれて効果的なカリキュラムを再構築するためにも機能させなければならない。

このようなカリキュラム改善・開発のためには、＜図2＞に示したように、目の前の特定の子どもを対象にした作業単位による指導を振り返って、より効果的で一般的な資料単位を作成し、その集積によってカリキュラムを改善・開発していく。この作業をより効果的にするためには、教師間のコラボレーションによる成果と課題の共有化に基づく単元マネジメントの積み重ねの作業がなければならない。



＜図2 カリキュラム改善・開発の単元の関係＞

2. カリキュラム・マネジメントのための基礎作業

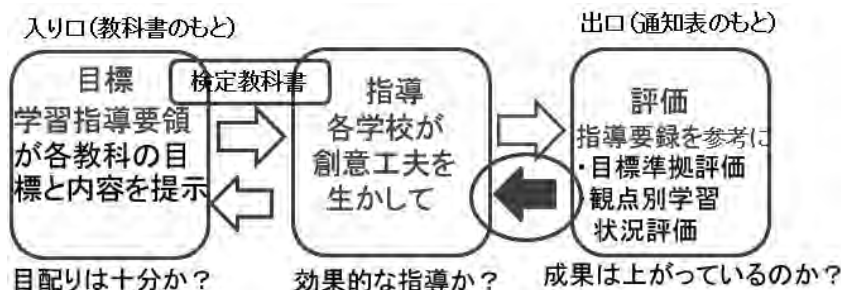
① 教科書を読み解いて現行のカリキュラムの理解から

カリキュラム・教育課程の構造を縦断的に捉えたと＜図3＞「目標と指導と評価の一体化」(PDCAサイクル)となり、横断的に捉えたと＜図5 目標の実現から見た教育課程の横断的構造・学校教育の守備範囲＞となる。

＜図2＞において示したように、事前計画としてのカリキュラムとは、特定の学習者を対象とした単元計画である「作業単位」の展開の成果を振り返って総括し、今回はこのように展開すべきといった教材や学習の場の設定、展開のあり方などを準備した一般的な単元計画である「資料単位」を集積したものである。

しかしながら、学校教育においては、入り口に当たる目標は学習指導要領で、出口にあたる評価は指導要録で、その間に位置する「指導は各学校が創意工夫を生かして」と示されながらも、目標と内容については「主たる教材としての教科書」による具体化に頼るあまり創意工夫を生かした指導が十分に展開されていない現状がある。「たかが教科書、されど教科書」のことばがあるが、資料単位としてのレディメイドの教科書を、いかにオーダーメイドの作業単元に再構成、組織化し目の前の子どもに適切化して展開できるか、そしてその成果を誤答分析等によって振り返り、資料単元化して集積し、学校中心カリキュラムを構築できるかが、カリキュラム・マネジメントの実質的、実践的な課題であるとともに、カリキュラムを効果的にマネジメントするための最良の近道でもある。

ただ、教科書がとりあえず代替してくれている資料単元の総体としてのカリキュラムを生かさな



＜図3 教育課程の縦断的構造—目標と指導と評価の一体化—＞

手はなく、これをもとにしての作業単元の実践を経ての学校独自の資料単元の作成から学校中心カリキュラムの構築、開発に向かうのが現実的である。どのような内容がどのように順序立て、系統化されて配列されているか、内容に即して付けるべき資質・能力を明らかにした上で、それらの系統性は保持されているか、保持されていないならどのような教材を準備して補っていけばよいか、教育課程の改訂で強調されている「見方・考え方」についてはどのようになっているのか等、教科書の内容をひも解き、それをたたき台にして吟味・検討を行って作業単元化し、実践後の振り返りを基にしての資料単元化したものの集積による学校中心カリキュラムの作成こそが、カリキュラム・マネジメントを支える有力で効果的な基礎作業である。当然そこには、内容と能力を統合しての単元をどのように展開していくか、主体的・対話的で深い学びを成立するためのアクティブ・ラーニングによる授業設計と展開による指導の工夫の振り返りによる改善も含まれていなければならない。

② 教育課程の改訂で求められる資質・能力からのカリキュラム・マネジメントの課題

今回の教育課程がめざす目標は、「何を学ぶか」といった内容ではなく、「何ができるようになるか」といった新しい時代に必要となる資質・能力であり、従前の智・徳・体を統合した「生きる力」の内実を、「生きて働く知識・技能の修得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」の3つの資質・能力の統合に発展的に継承したものである。

未来からの留学生であるこれからの時代を生きる子ども達に求められる資質・能力は、これら3つの資質・能力だけにとどまるものではない。「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」の「等」には、非認知的能力やメタ認知能力が入ることも忘れてはならないことであり、これらは「学習指導要領」の改訂に続く「指導要録」の改訂において「学びに向かう力」の内実として示されている。

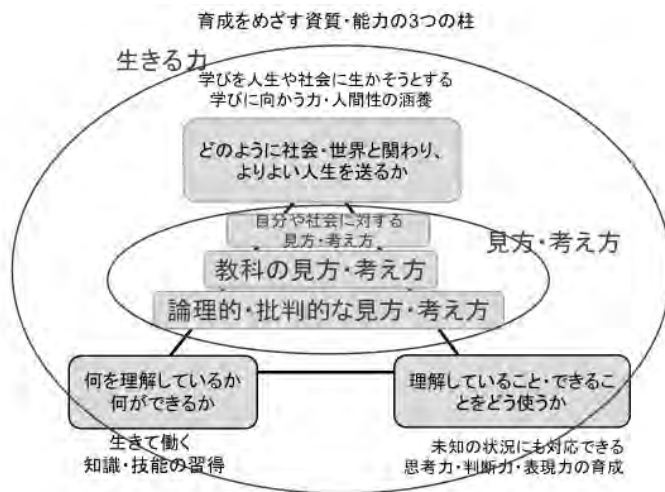
以上の能力の育成を、目標の総体としてカリキュラム・マネジメントのめざす目標に位置づけて単元及び授業づくりの構築を行っていかねばならない。その際には、3つの資質・能力として示された各観点の目標の語尾、具体的には「修得」「育成」「涵養」にも表れているように、高度な認知能力も含めての認知領域、精神運動領域、情意領域の目標の特徴に由来する到達目標、向上目標（方向目標）、体験目標等の目標類型の違いにも留意した上で、授業設計及びカリキュラム・マネジメントを展開しなければならない。そのための目標分析や目標の構造化さらにそれに基づく適切な教材の準備等は、アクティブ・ラーニングを授業デザインとして「どのように」展開するかとともに今後の重要な課題である。

3. 見方・考え方を育成するための単元を越えての系統化のための教材開発を

今回の教育課程の改訂を踏まえてのこれからのカリキュラム・マネジメントの中心的な課題は、＜図4＞に示すように、資質・能力の核に位置する見方・考え方をどのように育成していくかである。

この課題解決にあたっては、単元を単位に、アクティブ・ラーニングを授業デザインとして、主体的・対話的で深い学びに向けて＜どのように＞展開していくかについて工夫をすることも当然大切であるが、その前提として＜何を＞にあたる内容そのものが、見方・考え方を開くための価値を内包した教材でなくてはならない。

例えば、6年 算数「速さ」がテーマであれば、次のような教材の準備によって論理的・批判的な見方・



<図4 育成をめざす見方・考え方の構造>

考え方及び教科の見方・考え方の効果的な育成が期待できる。

<問題①>

『太郎と花子が100 m競争をしました。花子がゴールインしたとき、太郎はまだ3 m手前でした。そこで花子のスタートラインを3 m下げました。

2人は同時にゴールインできるでしょうか。

同時にゴールインできないなら、どうすれば同時にゴールインできるでしょうか。

また、太郎が先にゴールインするには、どのようにすればいいのでしょうか。』

この問題は線分図等によって問題構造を明らかにして、論理的に思考すれば明快に解ける。所用時間の記載がないので、自由に設定すればよく、1とするのが数学的で汎用的であるが、仮に10秒として計算で解く方法も写真判定のような判断になって興味深い。

未知の状況に対応するために、速さの概念の基礎・基本に還り、論理的に順序立てて考えること、つまり「速さは、距離と所要時間で決まる内包量であること」をもとにして論理的に思考を進めることによって、生きて働く知識・技能の習得が確実になる。そのためには次のような問題も効果的である。

<問題②>

『往路（行き）が時速60km、復路（帰り）が時速40kmで走行した車があります。

この車の平均時速は、何kmでしょうか。』

<図4>で示したように、今回の教育課程の改定によって育成をめざす資質・能力の核になる「見方・考え方」とは、論理的・批判的な見方・考え方であり、その上に内容に即しての教科の見方・考え方が位置づけられる。このような見方・考え方の育成には、カリキュラム上の見通しのもとに系統的・発展的に適切で効果的な教材が単元をまたいで準備されることが、効果的な育成のための前提条件である。

例えば、このような①②の問題に続いて、 $(\text{距離}) \div (\text{時間}) = (\text{速さ})$ の論理構造に前もっての(距離)を増やし、追いかける速さを加えての「旅人算」、さらに、速さを増減して時間を求める「流水算」を教材として設定して教科の考え方としての速さの概念を確かなものとし、さらに「アキレスと亀」の

パラドックスを経て、やがて瞬間の速度や距離の値を出す方法として微分、積分への期待をもたすという展開等が考えられる。

展開の過程において、単元をまたぐ展開の節目、節目で、これまでの見方・考え方と新しく学習した内容を統合して認知構造を再構成する展開を工夫することも、未知の状況に対して知識・技能を生きて働かせて問題を解決する能力を育成するために効果的であることも忘れてはならない。

4. 急務の課題としての人間性の涵養のための教材の系統化

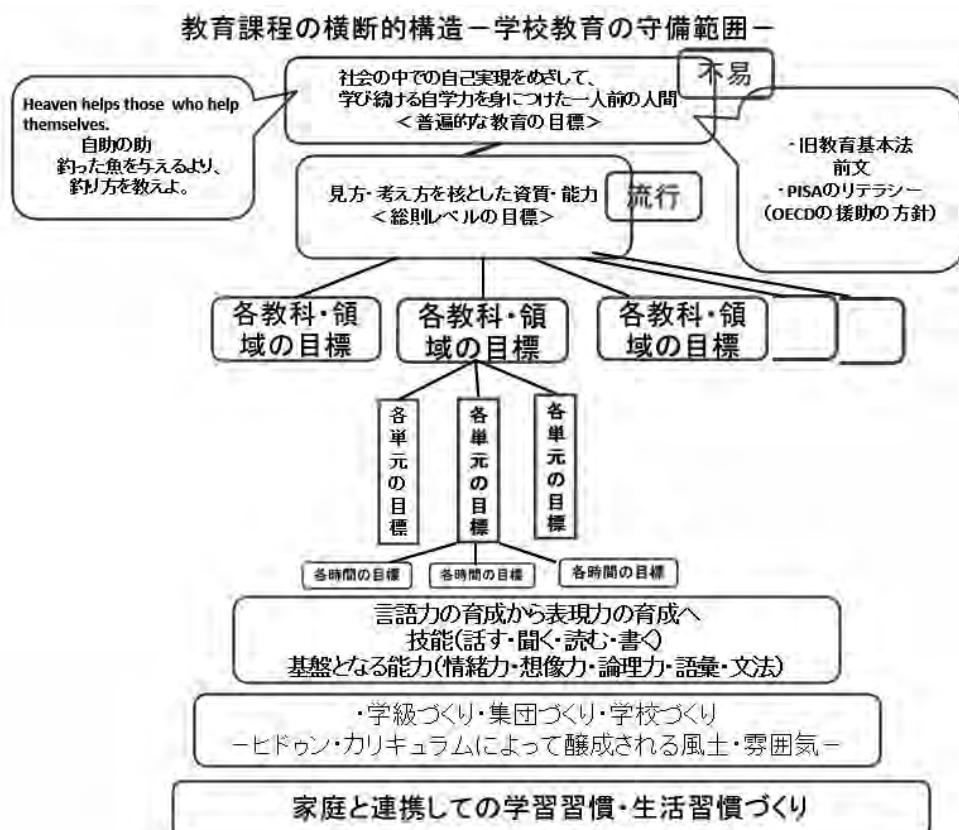
ー学びだけでなく、育ちの目標との両全の実現のためにー

＜図4＞に示したように、カリキュラム・マネジメントが育成をめざす見方・考え方は、汎用的、認識論的な「論理的・批判的な見方・考え方」を土台に、教科の内容に即しての「教科の見方・考え方」、そして社会と関わり、よりよい人生を送るための「自分や社会に対する見方・考え方」である。

メタ認知を不可欠の要素として、非認知的能力の育成も含む、この「自分や社会に対する見方・考え方」は人間性の涵養の土台である。

＜図5＞は、各段階における「目標の実現」に焦点を当てて、教育課程を横断的に分析した図である。

目標には、知識・理解の到達目標のように1時間の授業で達成できるものもあれば、見方・考え方の向上（方向）目標のように単元等の授業で育成を図るもの、さらに単元の成果を統合して実現を図る教科の目標、そして各教科の目標の成果を統合して図る＜総則レベル＞の目標、さらに不易的教育



＜図5＞ 目標の実現から見た教育課程の横断的構造・学校教育の守備範囲＞

目標としての自立した人間育成としての目標もある。

例えば「生活科」では、各単元に固有な気付き等の目標の成果を統合して単元の目標である「自立の基礎の育成」をめざすが、「自立の基礎」の中心を「学びの自立の基礎」ととらえ、目標と内容、方法の自立をその構成要素として、学校探検、町探検等の自由な探究活動と、そこで発見した自分にとっての大発見を表現する自由な表現活動を柱とし、自由な探究と表現活動の成果の共有化を図りながら気付きの質の深まり、幅の広がりを図る展開をとっていく。これは展開がそのまま教科の目標の実現につながっていく例である。

人間性の涵養はいずれは自己目標となり、社会の中で自己実現をめざすプロセスとしての人生を歩む際の土台となるものであり、メタ認知力及び必要な非認知的能力を自らの学びによって身に付けていかねばならないものである。

このような目標の実現にあたっての教材の系統化の構築及び適切で効果的な指導・展開等を中心とするカリキュラム・マネジメントのあり方については、今後の課題であるが、「自分自身の態度や価値観を探究することに重きを置く」といったボンウェルのアクティブ・ラーニングの定義（『Active Learning』 Bonwell, 1911）やブルームの新タキシノミー、さらに「主体的・対話的で深い学び」といった展開の指針が有力な手がかりを示していると考えられる。この課題解決への試みや考察については、次の機会に譲るものとする。

参考文献・引用文献

「新学習指導要領をひもとく－PDCA サイクルによる教材開発と展開・評価の活用－」加藤明著 文溪堂 2019

Abstract

Future Curriculum Management Issues and Prospects － In Order to Develop Qualities and Abilities and Cultivating Humanity －

Kansai University of Social Welfare Akira KATO

If the curriculum is the primary feature of school education, its management is the primary competence of teachers. Curriculum management is the prospect of what kind of subject content, how to convert it into teaching materials, how to develop it, confirm the results, and reflect it in future curriculums in order to realize the goals. This outlook starts with the setting of a goal, and setting a goal is both an entrance and an inside-out evaluation as an exit. The aim of this paper is to consider the ideal way of setting goals from such a problem consciousness. Curriculum management and lesson design for realizing the overall goals revealed in this article shall be given to the following opportunities.